

### III. 層位・文化層

本遺跡は西側にやや傾斜する台地上に位置しているが、発掘区ごとのセクションを観察すると層序の変化はみられない。部分的に後世の攪乱による影響がみられるだけでほぼ単純な層序を示している。

第I層、表土、耕作土であったため攪乱がみられる。黒色の色調を呈し非常にかたく、しまりがある。小礫を含むが、それは礫層が浅い位置に存在するからであろうか。河岸段丘が多く位置するこの地域はどの層にも含まれているようである。

第II層、茶褐色の色調を呈し柔らかくしまりのない層である。本遺跡では上下二つに分けられるかと思われるが、あえて分層はせずII層は一つとした。層厚は30cm~40cm位で上位はI層と明瞭な区分ができ、下部はローム層に漸移的に堆積している。

第III層、黄褐色ローム層、この層からローム層が始まる。II層のように柔らかくないが上位はソフトロームとして認められ、下位はハードロームとして確認でき、そのため上位にはしまりがなく、下位は少し粘性があった。本遺跡の遺構はすべてこの層まで掘り込まれている。またこの層には少量のスコリアと多量の小礫が含まれている。

第IV層、砂質ローム層、灰褐色の色調を呈した層で下位の層つまり礫層との漸移層として確認されるものである。しまりはあまりなく粘性は最も強い。礫は上位の層より多く含まれ比較的大きい礫も含まれている。

第V層 立川礫層であり大きな礫が多く存在する。層厚まで知ることはできなかった。

以上の層序区分によって本遺跡では第II層に縄文時代の遺物と遺構が包含されており、縄文時代の生活址はすべてこの層中に展開されている。その他の層には、遺物などなにも発見されていない。

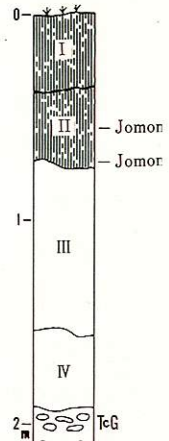


Fig. 2 層位と文化層

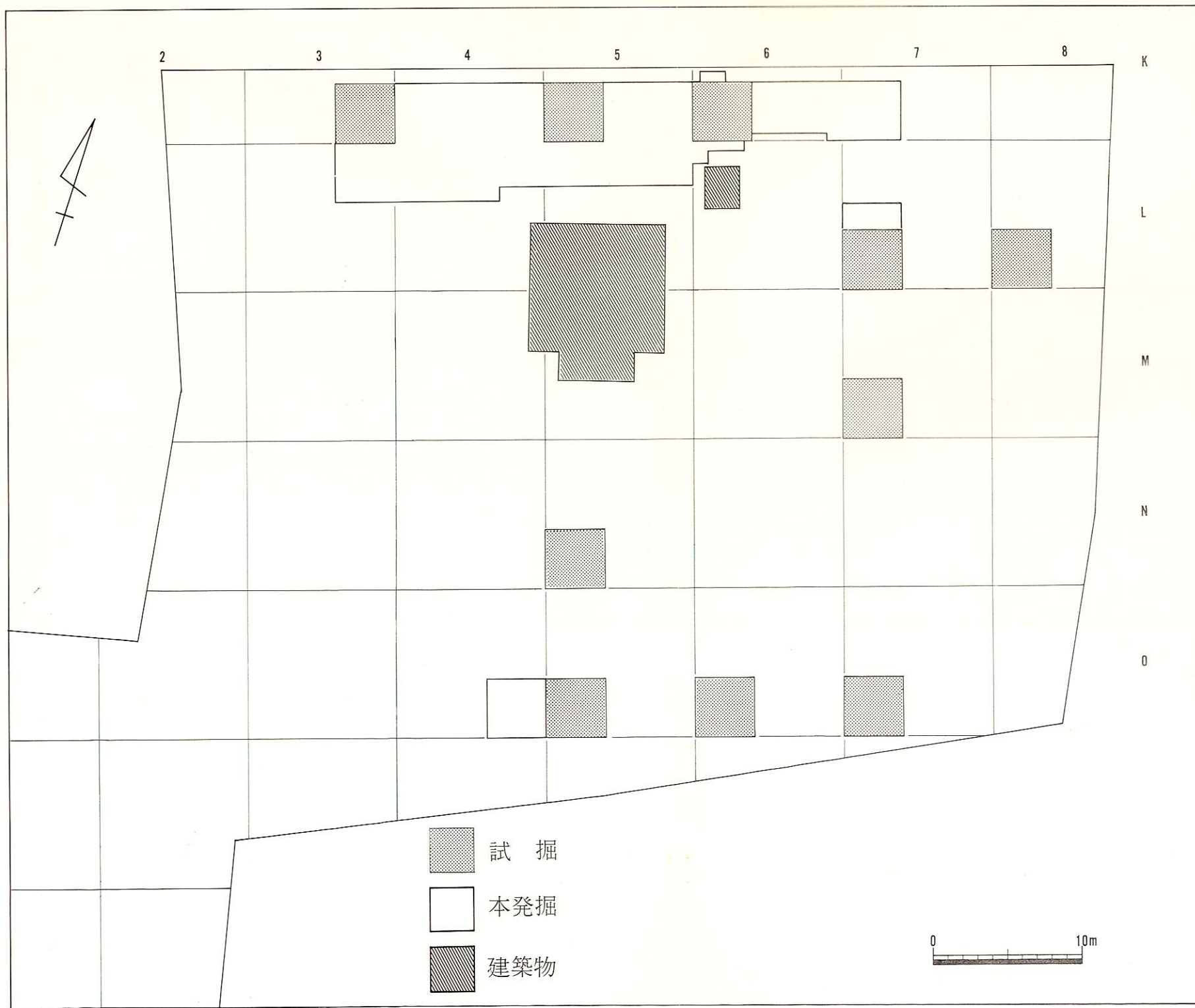


Fig. 3 発掘区